

Dhātu ~ Gotra

水 谷 幸 正

本論攷は「佛教大學學報・第三十一號」における拙論「如來藏と佛性」に續くものである。すなわち、その最後の附記でことわつておいた「因、ダーツ及ゴートラについて」に相當するものであり、如來藏思想（佛性思想）成立の基盤を與えている〈dhātu〉・〈gotra〉兩術語の吟味によつて、その思想的意義を解明しようとするものである。したがつて前拙論の承前という意味における體裁であることを豫じめ一言しておきたい。

一

われわれはさきの論攷において、涅槃經・寶性論を主たる典據にして考究した結果、インド佛教思想においては〈dhātu〉・〈gotra〉あるいは〈garbha〉の概念によつて、いわゆる佛性思想が形成されていたこと、しかもそれは如來藏思想と同一の流れであることを確かめることが出來た。したがつて如來藏思想の展開をよりの確に跡づけるためには〈garbha〉のみならず〈dhātu〉と〈gotra〉についても、その語義を明確にし、その語の荷なつている思想的意義を明かさなくてはならない。かの寶性論に「衆生は佛身を生ずる〈gotra〉であるということに基いて、如來の〈dhātu〉が衆生の〈garbha〉であることを説示する^①」と論示していることが、如來藏説におけるこれら術語の持つ意味をよく示めすものである。この小論の所期するところは、かかる論理が導き出される思想史的背景を明か

し、その意義を考究することであるが、まず(一)〈dhatu〉の語義を明かし、続いて(二)〈gotra〉のそれを考察し、更に(三)これらの術語による如來藏思想の形成が如何になされているかを實性論を中心に考究することによつて、如來藏の構造を説明していこう。

註① 梵本＝シュンストン本 (Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra, Ed. E. H. Johnston, Palma, 1950) p. 72, 7~10.

藏本＝デリゲ版 (sems-tsam, phi 字函・東北大學所藏影印本) 111・a.

漢本＝大正・三一・839・a.

二

〈dhatu〉は普通に「界」と漢譯されている。しかし、漢譯用語一般がそうであるように「界」という譯語によつて意味づけられ傳承されてきた概念内容と、その原語である〈dhatu〉との間には少なからざる意味の距たりがある。佛教梵語集大成の偉業を打ちたてた現代梵語學の重鎮、F・エジャートン氏はその大著“Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary”の中に〈dhatu〉を七義に分けて佛教的用語例を舉示している^①。それを要約すればつぎのようである。

- 1) physical element. constituent of the material world.
- 2) element in the body exclusively and specifically. bodily humor.
- 3) psycho-physical constituent element of the personality in relation to the outside world.
- 4) constituent element of the mind, heart or character, and so by extension character, nature, natural disposition.
- 5) sphere. region. world. state of existence.

Dhātu ~ Gotra

6) mass, abundance, large quantity.

7) relics.

しかしこれだけで充分な正しい理解であるとは云い得ない。主として梵巴經典にもとづいて資料を蒐集整理し、漢譯經典を充分に利用し得なかつたことに招來する不完全さをあらわしている。^③

そもそも〈dhatu〉は *√dha* (to put, place, sat, lay in or on) より作られた語で、layer, stratum, constituent part, ingredient, element, primitive matter の義である。^④ 特にそれは body, earth, world, などについて用いられ、そのような全體的なものの本質、要素をさし、更にその要素、成分を分類し種別する意味となる。エジャートンの擧げる①～④がこれに相當し、地・水・火・風の四大界、六根・六境・六識の十八界というのがそれである。またこのように區別された一定の領域、あるいは集團をもさすのであつて、エジャートンの⑤、⑥にあたり、欲・色・無色の三界とか世界とかいうのがそれである。漢譯で「界」と譯されるサンスクリット原語としては、このほか〈sman〉〈viśaya〉があり、〈sman〉は結界というように限定された領域を、〈viśaya〉は根識の對象となる境界を意味する^⑤のであるが、〈dhatu〉が三界・世界というように空間を區別する場所的な意味に主として理解されているから、その點ではこの三者の混淆は避けがたい。

しかし〈dhatu〉の本義はむしろ前者の「本質・要素・成分・構成」ということにあつて、その用語は「十八界」を基本形としている。たとえば、原始佛教における觀法の綱格である五停心觀の第四に界差別觀を擧げるが、それは十八界を觀じて著我を對治することである。^⑥ そのほか古い經論において説述する界は殆んど十八界に終始している。ところが、十八界に對する考察が進むにつれて、アビダルマ佛教ではすでに界が種々の意味を荷なつて佛教術語化されていたことを代表的な經論が物語っている。大毘婆沙論には「種族の義、是れ界の義なり。段の義、分の義、片の

義、異相の義、不相似の義、分齊の義、是れ界の義なり。種々因の義、是れ界の義なり。聲論者は説く、馳流の故に界と名づけ、任持の故に界と名づけ、長養の故に界と名づく」といつて十一義を數えて聲論派の異説をも擧げており、瑜伽師地論ではこれを整理して、因・種子・本性・種性・微細・任持の六義を擧げている。また佛教術語解釋のスタンダードを示めずものとして常用されている俱舍論では「法の種族の義は是れ界の義なり。一の山中に多くの銅鐵金銀等の族あるを説きて多界と名づくるが如く、是の如く一身或いは一相續に十八類の諸法の種族あるを十八界と名づく、此の中の種族は是れ生本の義なり、是の如くの眼等は誰が生本なる、謂わく目の種類と同類因なるが故なり」といい、地・水・火・風を四界と名づけることを解釋して「能く自相及び所造の色を持するが故に名づけて界となす」といふ解義をなしている。そのほかの諸アビダルマ論書や、さらに大乘莊嚴經論などの大乘論書およびその釋疏にも、同じような理解を示めしているが、それらを通じて知り得ることは、インド佛教においては殆んど定型化されたような傳承をもつて、主として成分・種族・種子・種性・因の義に解釋されているということである。シナ佛教では唯識家が持・因の二義にまとめ、華嚴家が因・性・分齊の三義をもつて説明しているのも、インド的解義を受けついで整理したものといえる。

ところで、〈dhātu〉にしろ「界」にしろ一用語をもつてこのように多くの義を表示するからには、その用いかに應じて意味がいかようにでも理解出来る點で字義の曖昧性という缺點を逸れることは出来ない。〈dhātu〉の譯語として〈khamas〉、〈rigs〉、〈dbynis〉の三様の譯語を持つているチベット佛教は、譯語の不統一というよりは〈dhātu〉の持つかかる語義の多様性を意識的に區別して用いたものであるとみることが出来る。〈khamas〉は十八界・四大界と用いるような本質・要素の義において、〈rigs〉は如來藏說、アラヤ識說で用いる性・因・種子の義、すなわち〈gotra〉と同義に、〈dbynis〉は金剛界・不可思議界と用いるような領域・依處の義にそれぞれ使いわけ

している。たとえば、法界 \angle dharmadhātu \angle を法の本質の義では chos kyi khaums、法を生ずる成分としての因の義では chos kyi rigs、法を構成する世界の義では chos kyi dbyins、と語義に應じて異語譯しているが如きである。^⑩ここにわれわれは、 \angle dhātu \angle が本質的なもの、成分的なもの、構成的なものという、いわば哲學的思惟の原理的な基礎概念の意味を持つていること、したがってそれから派生する多くの意義に轉用されることは當然であるが、種性を義とする \angle gotra \angle と直結し、種子を本義とする \angle biā \angle とも手を繋なぎ得ることを知り得るであろう。しかもそれは佛教術語としての基礎的な意味を荷なつてゐるから、この語の持つ意味内容の解釋の如何によつて思想的對立を招くにいたつており、佛教思潮展開の一ポイントを與えてゐる。すなわち \angle dhātu \angle に佛教特有の根本義が附加されることによつて佛教教理が發達しているということである。そのことをさきに例示した原理的に最もよく用いられる「法界」を例にとつて、いまだ少し詳しく解明してみよう。

まず第一に、十八界中の法界が法の本質を意味するものであるにしても、六識中の意識所縁の境界として六境中の法界であるからには、むしろ十八界中の種別された一領域を示めすものとして法界が定立されたとみるほうが妥當であらう。かかる意味での法界が術語としての原意であつたと考えられる。^⑪

第二に、それが十八界中より別立し、大毘婆沙論に「有餘師は説く、法界は總じて一切の法を攝し盡くす、十七界も又法と名づくるを以てなり」^⑫と述べてゐるように、一切の存在たる法の集まりとして、法界遍滿というようないわば構成的な全體をさすようになった。しかも、その全體的なものを構成する成分の義より、本質、本性、攝持の義として諸法の本質、すなわち法性、眞如と同義に用いられるようになるのである。これは \angle dhātu \angle そのものの持つ意義よりして當然のことである。たとえば、雜阿含經第十一に「若し佛世に出づるも、若し未だ世に出でざるも、此の法常住にして、法住、法界なり。此等の諸法は、法住、法空、法如、法爾にして、法は如と離れず、法は如と異なら

ず」^⑮と説く經文は、大乘佛教へ受け繼がれた法界常住の精神を説くものとして極めて重要であるが、そこにいう法界とはパーリ本相應部因緣編第一によると、該當箇所は \wedge sa dhatu \vee となつていて、やはり本質の義に用いてある。しかもそれは眞如、法性と不異不離であると理解され得るから、佛教の根本義である緣起の本質、要素という義において \wedge dhatu \vee を術語化したものというよう。いいかえれば、法界が緣起という法性、法位によつて成り立つていっているという佛教的原理を示めず語として用いられているのであつて、 \wedge dhatu \vee の第一義的用法をここに見るべきである。

第三に、 \wedge dhatu \vee 自身のもつ layer, primitive matter の義よりして、何かを生ずる、すなわち聖道の法を生ずる因 \wedge heu \vee となるという意味で法界と稱している。やぎにしばしば擧げた \wedge dhatu \vee の因の義というのがそれであつて、そこには生じられた聖法という教義が與えられていることを豫想しており、したがつてそのような思想背景を俟つてはじめて成り立つ義でなければならない。そしてその聖法のありかたに應じて教理が異なつた方向へと展開するにいたる。アラヤ識思想と如來藏思想の對立がそれである。

アラヤ識系では \wedge dhatu \vee を \wedge bija \vee （種子）とみて、一切法の因たるアラヤ識となしている。中邊分別論に法界を解釋して「聖法の因を義となすが故に法界と説く、聖法は此の境に依りて生ず、此の中、因の義是れ界の義なり」といい、つづいて界を解釋して「種子の義は界の義なり、たとえば黄金あるところには黄金の界といい、黄金の種子を意味するが如し」^⑯といつて、一切法を生ずる因としての種子識の意味で界を理解しており、また成唯識論にアラヤ識存在を證明する五教十理證の第一證として、大乘阿毘達磨經の逸文である「無始時來の界は一切法の等依なり、これに由つて諸趣有り、及び涅槃を證得す」^⑰の偈を擧げ、界を同じく因の義としてアラヤ識となしていることなどが、その顯著な例である。ところが、如來藏系では \wedge dhatu \vee を \wedge gotra \vee （種性）とみて、法身の因たる如來藏となすのである。勝鬘經に説く「如來藏とは是れ法界藏なり、法身藏なり、出世間上上藏なり、自性清淨藏なり」^⑱の五藏義が、

實性論ではかの大乗阿毘達磨經の逸文を引用してその界（但し「性」と漢譯されている）を解釋するのにそのまま用いられている。^{②①} さきにアラヤ識と理解した \wedge dhātu \vee が、ここでは全く如來藏の意味にしか解釋し得ないことを示めすものである。また佛性論では五藏義がそのまま如來藏の五種義として解釋されているが、この佛性論の理解を通して、攝大乘論世親釋（眞諦譯）には「此の界に五義あり、一は體類の義、一切衆生は此の體類より出でず、此の體類に由つて衆生は不異なり、二は因の義、一切の聖人法四念處等は此の界に縁つて生ずる故なり、三は生の義、一切の聖人所得の法身は此の界の法門を信樂するに由るが故に成就することを得、四は眞實の義、世間に在つて破せずして世間より出で亦不盡なり、五は藏の義、若しくは此の法に應じて自性善なるが故に内を成じ、若しくは此の法を外して復た相應すると雖も則ち蔽を成ずるが故に」^{②②}と論述し、しかも法界の五義として性・因・藏・眞實・甚深を重ねて述べているが^{②③}ごときは、同じく \wedge dhātu \vee を如來藏となすものにほかならない。かくの如く、アラヤ、如來藏兩思想の相違は \wedge dhātu \vee に關する理解に最も端的に現われているが、一方、兩者の共通性もまた \wedge dhātu \vee に基づくものにほかならないといえよう。

ところで、この \wedge dhātu \vee を如來藏と理解するには、如來藏が緣起・空・般若というような佛教特有の根本概念と内容的にシノニム化された思想領域が基盤としてあつたであろうように、法界も原理的に深められて、不増不減經や大乘法界無差別論などで説かれる一法界という概念、^{②④}さらに法界緣起という後世の華嚴宗教學的な考え方が育成されていたであろうことが前提とされる。と同時にそこには \wedge gotra \vee についての佛敎的理解が交流し、媒介となつていたのであろうことが、如上の敘述よりして肯定されるであろう。 \wedge gotra \vee の佛敎的意味の詮索が要求されるゆえんである。

註① Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, F. Edgerton, Yale Univ. 1953, p. 282. a. ff.

② 以下、詳述するであろうように、①③④⑤⑥⑦の四グループに分類出来るから同一系統の語義を用語例の列舉とい

うことで、ことさらに區別した感があり、また用語例にも混亂があり、しかも、最も重要な「因」「種子」の義が無視されている。

③ W. Monier, "Sanskrit-English Dictionary", p. 513. c.

④ 唯識説における \wedge visaya \vee が「境界」として多用されているのは、唯識三十頌、大乘莊嚴經論、中邊分別論などの大乘論書を見れば一目瞭然である。 \wedge sman \vee (\wedge simā \vee とも用いる)。この \wedge は Mahāvīpattī (禪本) No. 7710 に「界分」とある。

⑤ 大毘婆沙論卷四〇、卷一二七、雜阿毘曇心論卷五、卷八、瑜伽師地論卷二六、卷二七、大般涅槃經卷三六。

⑥ 雜阿含經卷一六〜一七 (大正・二・115.c~118.b)。

Samyutta-nikāya. V. 56. 203, 10. 27. 界身足論 Dhātukatha

⑦ 卷七一 (大正・二七・367.c)。

⑧ 卷五六 (大正・三〇・610.a)。

⑨ 卷一 (大正・二九・5.a)。

⑩ Ibid. (Ibid. c. d)。

⑪ 大乘莊嚴經論卷一、種性品第四 (大正三二・594.b)、中邊分別論卷上、相品第一 (大正・三一・452.c)、眞實品第三 (Ibid. 457.c)、三無性論 (宇井本 (印哲研究卷六) p. 279)、十八空論 (宇井本 (印哲研究卷六) p. 166. ff)、大乘阿毘達磨雜集論卷三、俱舍論稱友疏 (荻原本 p. 54)、中邊分別論安慧釋 (山口本 p. 210)、唯識三十頌調伏天釋疏 (野澤本 p. 401, 405)。

⑫ チベット譯本における三種の使いわけは、實性論は勿論のこと、各種の經論において指摘出来るが、例えば大乘莊嚴經論の用語例を *Index to the Mahāyāna-Sūtrāṅkāra*, by Gadjin M. Nagao, Tokyo 1958、によってみるならば明瞭である。

一二四頁参照。

⑬ 註⑥参照。

⑭ 卷七一 (大正・二七・370.c)。

⑮ 大正・二・84. d. S. N. II. p. 25.

⑯ 卷上 (大正三二・452.c)、なお安慧釋の梵本は山口本 p. 50, 22 ff、その和譯は山口本 p. 79 ff 参照。

⑰ 卷上 (Ibid. 457. a)、安慧釋梵本は山口本 p. 143, 8 ff、和譯は山口本 p. 288 ff 参照。

- ⑮ 卷三 (Ibid. 14・a)。なお梵文は “Anādikāliko dhātūḥ sarvadharmasamāśrayaḥ/
tasmīn sati gatiḥ sarvā nirvāṇadigamo ’pi ca //” (Ratnagotravibhāga. Johnston. p. 72, 13.)
- ⑯ 自性清淨章第十三 (月輪本 p. 151)。
梵本 || ショーンストン本¹ p. 72 15ff.
藏本 || デリゲ版・111 b.
漢本 || 大正・三一・839 a.
卷二 (大正・三一・796 b)。
⑰ 卷一 (Ibid. 156 c)。
⑱ 卷一五 (Ibid. 264 b)。
⑳ 山口益「般若思想史」八四頁以下参照。ここでは如來藏思想を空・法性の歴史的實踐として把握している。また、高崎直道
「如來藏と緣起」(印度學佛教學研究二ノ一・p. 244 中) 参照。
㉑ 不增不減經は、法界はそのまゝ衆生界にして、増もなければ減もないことを説く經典である。例えば「舍利弗、一切愚癡凡
夫不如實知一法界、不如實見一法界故起邪見心、謂衆生界増衆生界減」(大正十六・466 b)「舍利弗、此二種見依止一界、同
一界合一界、一切愚癡凡夫、不如實知彼一界故」(Ibid. 467 a) また大乘法界無差別論は題名のごとく、法界に差別のないこ
とを説く論である。例えば「復次應知、唯有一乘道若不爾者、異此應有餘涅槃故、同一法界豈有劣涅槃勝妙涅槃耶」(大正
・三一・894 a)。

三

〈gotra〉は go (cow, ox) + √trai (protecting) よりなる語で、protection or shelter for cows, cowshed, stable
for cattle などの遊牧時代になごりを持つ原意から、family enclosed by the hurdle をちすにいたり、それが fa-
mily そのものをも意味するようになり、やがては race, lineage の義に用いられて、それが一般化して「種性」

〔種姓〕も同じ、〕と漢譯されている。佛教的用語としてはエジャートンが指示しているように^①

(一)、宗教的グループとしての family

(二)、鑛山や鑛石の mine

(三)、種姓の origin, basis, source

(四)、種族の kind, class, category

などを意味する用法が知られている。(三)、種姓、(四)、種族ということは家系、血統の觀念と共にいきおいカースト的な秩序による社會階級を意識せしめる。しかしカースト打破を叫んだ佛教においては、かかる家系主義的な種性論から、(一)、宗教的な意味での種性論へと展開するにいたつた。(二)、鑛脈というものもこのような展開による理論と實踐の所依としての宗教的素質を意味するものである。

その佛教的意味についてはすでにオベルミラーが現觀莊嚴論のツォンカパによる註釋書である Gser-phren (金鬘論) や、ジャムヤン・シハバ Jam-yan sad-pa による同じ註釋書 Phar-phyin-skabs-brgyad-ka (般若波羅蜜八章論) に基いて説一切有部、經量部、瑜伽行派、中觀派(實性論所説を指している)における〈gotra〉論について略述しているし、またそれを基點とするすぐれた考究も先學によつてなされている。^② いまは特に如來藏・佛性との關聯性においてその語義を明確にしてゆきたい。

瑜伽師地論によるならば、〈gotra〉は菩提を得すべき本性であるから、性〈prakṛti〉、界〈dhātu〉、種子〈bīja〉ともいわれ、またそれはいいかえれば菩提が實現せられる所依でもあるから、依持〈adhāra〉、任持〈upastambha〉、因〈hetu〉、所依〈nīśraya〉、階級〈upaniṣat〉、前導〈pūrvanigama〉、舍宅〈nīlaya〉などと同義異語であるといわれる。^③ これは〈gotra〉がすでに佛教教理の中に術語としての位置を確立したあとの解釋であつて、アビダルマ

佛教においては、アラカン果に到達する要素、すなわち聖者となるべき素質をさしている。俱舍論に「聖種の體はまた是れ無貪なり」^⑥と述べて、貪欲のないことが聖者の種性であるというのがそれである。このアラカン果を佛果、佛位^⑦ *buddhatva* におきかえるならば、大乘佛教にいう佛種であり(あるいは聖種という場合もある)、維摩經、法華經、華嚴經などの初期大乘經典といわれるものに散見するところである。

さらに、その種性によつて實現せらるべき果にいろいろな可能態のあることから、特に差別的觀念を構成すること、を強調するものが、佛教的人間のカテゴリーを示めす用語として用いている種姓論で、婆沙論や俱舍論で説く、聲聞乘、獨覺乘、佛乘の三種姓論、退法、思法、護法、住法、堪達、不動法の六種姓論^⑧があり、そのティピカルなものが、唯識說の中で定説となつたかの五姓各別論^⑨ *pañca-abhisamaya-gotra* である。アラヤ識中の本有種子によつて本來的に決定づけられているという菩薩種姓^⑩ *Bodhisattva-gotra*、獨覺種姓^⑪ *pratyekabuddha-gotra*、聲聞種姓^⑫ *śrāvaka-gotra*、不定種姓^⑬ *anivata-gotra*、無種姓^⑭ *agotra* の階級秩序的な論理が、種性といえはわれわれはすぐにこれを想起するほどに、*gotra* の思想の代表的なものである。しかし、これらによつて示めされる *gotra* は恰かも血統づけられた種族がいかなる外的變化を蒙つてもその血を變えることが出来ない、すなわちその種族性を改變し得ないように、いかなる修道を加行しても轉じることの出来ない素質・能力の先天的な區別を意味するものであり、定聚論(正定聚、邪定聚、不定聚などと區別する)、機根論(利根、鈍根などと區別する)と軌を一にするものであるが、それについては別攷を俟ちたい。^⑮

ところで、菩薩種姓とは佛種姓^⑯ *Buddha-gotra* のことであるから、それは佛に成るべき本性として「佛性」といつて差支えないが、その佛性は内在化された因位的なものであつて、如來藏・佛性の持つ果位的な普遍性、超越性というものが見失なわれる虞れがある。そのことは、唯識說が、かかる佛性を本性住種姓^⑰ *prakṛistha-gotra* と習所

成種姓〈*saṃudānīya-gotta*〉の二種姓に分けて、前者を菩薩の身中に無始以來法爾として先天的に展轉相續している無漏殊勝の種子となし、後者を諸善を修習することによって後天的に獲得する性能であると、理解していること^⑧によつて一層明瞭である。

〈*gotta*〉を唯識説ではこのように内因的な潜勢力として、種子〈*bija*〉、性〈*prakṛti*〉、因〈*hetu*〉の面より理解するが、一方また依持〈*ādharma*〉、界〈*dhātu*〉としての〈*gotta*〉も理解されている。すなわち、〈*dhātu*〉に領域・種族の義があり、またエジャートンも採録しているように *mine* (鑛脈) の義が〈*dhātu*〉にも共通するから、佛教的人間の本質的條件を分類、種別する用語としての〈*gotta*〉はそのまま、一切の所依となる構成的本質的なものを意味する〈*dhātu*〉と語義領域を共有するにいたつた。まさに一言した如來藏系の〈*dhātu*〉と〈*gotta*〉の同義がそれであるが、さらに大乘莊嚴經論に「界に由る差別とは、衆生に種々の界有つて無量の差別あり、多界經に説くが如し、界の差別に由るが故に應に知るべし、三乗の種姓に差別有り」、中邊分別論安慧釋に「界は種姓にして種子なり^⑨」、俱舍論稱友疏に「種姓の義が界の義なり、種子の義が界の義なり^⑩」と諸種の大乗論釋に説いているように、アラヤ・如來藏兩系における〈*dhātu*〉の義の理解の相違を同一化しているところに〈*gotta*〉の意義をあらためて認めるべきである。本有の種子に基づく五姓各別説、無漏種子の本有・新熏によつて論理づける本性住・習所成の二種姓説などが成唯識論を中心にいかに精緻を極めているにしても、差別的、内因的な種性論のみでは有漏界〈*āsrava-dhātu*〉から無漏界〈*anāsrava-dhātu*〉への通達、いいかえれば人間の依處〈*āśraya*〉(所依)の轉換、すなわち「轉依」〈*parivṛtti*, *parivṛtti*〉を説明することが出来ない。すでに論じられているように、轉依とは因から果への單なる同一性連續ではなく、所依が全く反對のものになることであるから、そこには依處の義をもつ〈*dhātu*〉、しかも有漏界(衆生界)であると共に無漏界(法界)でもあるという根據自體としての〈*dhātu*〉を必須の要件とした〈*gotta*〉論が展開せ

しめられなければならない。「虚空が常に遍在すると考えられるように、それ（法界）も常に遍在すると考えられる。虚空が諸色に遍く及ぶように、それ（法界）もあらゆる衆生聚に遍く及ぶ」といい、また「衆生界は實に法身である。法身はそのまま衆生界である」という法界遍滿の原理によつて、淨なる法身が染まる衆生存在の根柢に及ぶから、逆に衆生の側からいうならば一切衆生に法身すなわち佛たるべき可能性がある、いいかえれば衆生が佛性（佛の種性〈buddha-gotra〉）を有っていることになる。しかしその佛性は決して内在的に理解することを本義とするものではなく、超越的根據から遍在化した普遍的なものとして理解されるところに〈dhatu〉を加味した〈gotra〉論すなわち如來藏説における〈gotra〉論がある。あらゆる衆生(gotra)が一切處(dhatu)に遍在する如來の胎〈garbha〉の中にあるという點に、如來藏論理の據りどころがあり、そこにまたはじめて轉依の論理も明確にうちたてられているのである。ではこのような〈dhatu〉と〈gotra〉を支柱とする如來藏説の體系がいかに組み立てられているか、實性論を中心に考察していこう。

- ① 前掲 B. H. S. G. Dictionary, p. 216. a.
- ② The Sublime Science of the Great Vehicle to Salvation, E. Obermiller, p. 96 ff.
- ③ 服部正明「gotra について」(浪速大學紀要卷三・p. 57 ff.)
- ④ 卷三十五(大正・三〇・498 b) 梵本は Bodhisattvabhūmi, ed. Wogihara, p. 2, p. 3.
- ⑤ 卷二十二(大正・二九・117 a)。
- ⑥ 例えば、維摩經卷中「示入下賤而生佛種……一切煩惱爲如來種」(大正・十四・549・b)。華手經卷二「譬如無牛則無醍醐、如是若無菩薩發心則無佛種、若有牛則有醍醐、如是若有菩薩發心則佛種不斷」(大正・十六・140 a)。大寶積經普明菩薩會「是胎王子必紹尊位繼聖主種」……如是菩薩、名紹尊位不斷佛種」(大正・十一・634 c)。法華經卷一方便品。
- ⑦ 大毘婆沙論卷七(大正・二七・3・b、33・b) 卷八一(Ibid. 417 c) 卷一〇三(Ibid. 534 c~b) 俱舍論卷二五(大正・二九・129・a ff.)

- ⑧ 拙稿「機根名義攷」(佛教文化研究第七號(近刊))参照。
- ⑨ 瑜伽師地論卷三五(大正・三〇・478 c)成唯識論卷二(大正・三一・8 b ff)。
- ⑩ 前節四七頁参照。
- ⑪ 前掲 B. H. S. G. Dictionary p. 216. a.
- ⑫ 卷一(大正・三一・594 b)。
- ⑬ “dhātu gotraṃ bijam” (山口本 p. 210)。
- ⑭ 荻原本・p. 54.
- ⑮ 成唯識論卷九(大正・三一・47 c ff)卷二(Ibid. 8 b ff)。
- ⑯ 前掲註⑨服部氏論文参照。
- ⑰ “yathāmbaraṃ sarvagataṃ sadā matam tathaiva tat sarvagataṃ sadā matam / yathāmbaraṃ rūpagaṇesu sarvagaṃ tathaiva tat sarvagaṇesu sarvagaṃ //”, (mahāyāna-sūtrālamkāra, IX. シンヤン本 p. 36) (Ratnagotravibhāga, シンヤン本 p. 71 参照)。
- ⑱ “Sattvadhātur eva dharmakāyaḥ pharṃakāya eva sattvadhātuh,” (Ratnagotravibhāga, シンヤン本 p. 41) 以下は不増不減經からの引用である(大正・一六・467 b)。

四

「Ratna gotra vibhāga」(寶性分別)という梵本題名がすでに示めているように、寶性論は三寶と佛性〇〇buddha-gotra〇〇についての分別、施設を意圖して作られた論書である。①

論釋冒頭の序論において、佛・法・僧・性〇〇dhātu〇〇・菩提・功德・業の七種金剛句〇〇Vajrapadāni sapta〇〇をめぐって論全體を組織づけ、この七句義にのつとつて所論を展開している。したがって寶分別はいうまでもなく佛・法・僧

の三句義の分別であり、性 \wedge gotra \vee 分別は、性 \wedge dhatu \vee 、菩提・功德・業についての分別である。 \wedge gotra \vee 分別が \wedge dhatu \vee についての分別であるとし、しかもそれが如來藏であるとするところに本論書を一貫する中心課題があり、その論理を基調としてまた独自の三寶分別がなされている。したがって、三寶觀はともかく、 \wedge gotra \vee 分別の \wedge dhatu \vee 義(第四句義の性義)すなわち如來藏についての論述が本論書の大部分を占めている。^③

佛・法・僧の三句義について論述したあと、何の法によつてこの三寶があるかと自問し、答えて本偈では「有垢眞如(性)と無垢(菩提)、離垢佛の功德と勝者の業、それらより清淨なる三寶を生じ、(それは)正しい義を見る者の境界である」といい、さらに註偈では「通達さるべきもの(性)、通達すること(菩提)、その部分(功德)、通達すべくなすこと(業)、順次に(はじめの)一句は清淨因であり、三(句)は縁である」といつて實と性の關係を明かしている。すなわち \wedge gotra \vee の本性たる \wedge dhatu \vee を三寶建立の因の義であるとなし、 \wedge gotra \vee の屬性ともいうべき後の三句義は清淨性を保持して衆生をして聞法せしめるから三寶建立の縁であるとなしている。いいかえれば、如來藏である \wedge dhatu \vee は三寶の \wedge gotra \vee (それは單なる種別の義ではなく、本質、根源、依處の義であることはいくまでもない)だといふのである。そして三寶の \wedge gotra \vee たる \wedge dhatu \vee すなわち如來藏を分別するのが本論書の意趣なのである。

いうまでもなく如來藏義の根本命題は「一切衆生に如來藏有り」(sarvasattvas tathāgatagarbhaḥ)ということである。この命題の根據はつぎのように本偈をもつて説明されている。「諸佛の佛智は(衆生界)を包むが故に、その自性は無垢にして無二であり、佛性 \wedge buddha-gotra \vee における果と考えられる故に、一切衆生は佛藏 \wedge buddha-garha \vee を有すると説かれる」。^④すなわち、

(一) 佛陀の菩提、涅槃の境界である佛智の遍滿によつて存在する衆生であり、一切衆生の存在根據が佛智によつて

支えられていること。

(二)、それは何故なれば衆生の本来自性 (dhātu) が無垢であり、佛の自性 (dharma) と異なる故であること。

(三)、したがって法身は衆生の自性たる清淨なる如來性 (gotra) の果位であり、衆生はその因位であること、その因位にある衆生の清淨なる自性 (dhātu, gotra) を如來藏と呼ぶのである。これら三の論理的根據をもつて「一切衆生に如來藏有り」ということを知り得るというのである。

このことを註偈では更に一層よく明瞭に組織だてて説明している。「有垢の眞如に關して、一切衆生は如來藏を有すると説かれてゐる。それは何を意味するかと云うならば、廣大なる佛身は遍滿しているが故に、また眞如は無差別なるが故に、また種性 (gotra) であるが故に、一切衆生は佛藏 (garbha) を有する」^⑦。これは如來藏品の冒頭に掲げている偈文であり、いわば本論書の根本的立場である。釋論ではこれを敷衍して、

(一)、一切衆生に如來の法身 (dharma-kāya) が遍滿していること。

(二)、如來の眞如 (tathata) は無差別であること。

(三)、如來の種性 (gotra) を有すること。

の三義によつて、一切の時、一切の衆生に如來藏有りと言ふんだと論述している。「如來藏有り」ということが「佛性有り」ということと同じように内在的な解釋に墮するおそれがあるから、如來藏の所攝藏義の理解に基くならばそれは「如來藏である」すなわち「一切衆生は如來藏である」ということと全く同義にはならない。しかも、法身——眞如——如來性という三種義によつて、衆生を如來藏となす論理が展開せしめられる。すなわち、如來の法身が遍在し、眞如が無差別であるという論理にもとづいて、如來の (dhātu) であり、(gotra) であるという衆生が譬喩的に如來の (garbha) であると措定される。いいかえれば (gotra) という點から、法身も衆生も本來的には同じ (dhātu)

なのであるが、ただ衆生は偶然的(āgantuka)な煩惱の垢を纏っているから有垢眞如(samalatathata)であり、法身は無垢眞如(nirmalatathata)なのである。そしてその有垢は無垢になるべき有垢であるという點から法身の胎(garbha)すなわち如來藏というのである。したがって、如來藏における轉依とは、ただ偶然的な垢(客塵)を除くということにのみ限定して一見するならば、有垢から無垢へは同一性の展開であつて、質的轉換を認めることが出来ないであらう。しかし「有垢眞如は、同一時に清淨でもあり雜染でもあるのであるから、この状態は不可思議である。甚深なる法を信解する獨覺にとつてさへ、境界とならぬものである」と説かれているように、如來藏の境界はわれわれ衆生の分別を超越した如來の側において説かれる不可思議甚深の領域であり、われわれにとつては、衆生は衆生である限り如來法身とは質的に斷絶する依處にあるとしか思惟出來ない。「すべての衆生に如來界(dharmu)を生ずる胎(garbha)が存在するが、かれら衆生はそのことを知らない」といわれる所以である。したがって、分別の立場に立つ衆生においては、その立場を超越することが轉依であるとしても、それは如來の側の作用であるにもかかわらず、それに通達することが出來ないから、有垢から無垢への清淨化を説示するのである。いいかえれば、轉依ということとは有垢の状態にあるという衆生の側においてのみ言われることであつて、超越的な普遍性に基づく如來界からするならば、それは法界(衆生界)の清淨化の作用にすぎない。したがって、實性論ではかの佛の菩提・功德・業を論理づけて轉依の根據を明かすのである。前節でふれたように、大乘阿毘達磨經の偈を解釋するのに(dharmu)を本來的にはすでに清淨である眞如(法界)であるが、しかし雜染された眞如(衆生界)すなわち如來藏であるとして、勝鬘經の五藏義をもつてしているのも、清淨化されるべき因位にあるという意味での因義に(dharmu)を理解しているからにはかならない。如來の(dharmu)、如來の(sutra)として如來の側から同一性を説き、清淨の根據を明かす如來藏説はいわば轉依の基盤を説くのであり、アラヤ識という雜染の根據を明かす唯識説は轉依の過程を説くものとい

えよう。^⑩ かの二種種姓について實性論が唯識説とは異なつた所論を展開しているのも、かかる立場の相違にもとづくものといえよう。

法身——眞如——如來性の一貫した論理をもつて展開せしめている如來藏説を、實性論はさらに、自體・因・果・業・相應・起行・分位差別・遍一切處・不變異・無差別の十義をもつて説明している。^⑪ そして佛性論では三藏義をもつて典型的に如來藏の名義を説き明かしていることはさきに詳しく論じたところである。^⑫

かくて、如來藏は有垢眞如であり、それは如來性、如來界であるということから、そのまま法身、眞如といわれる。そのほか、如來藏義を示めすのに實性論では種々の用語をもつて表現している。佛藏〈buddha-garha〉、衆生界〈satva-dhātu〉、法界、佛性〈buddha-dhatu, buddha-gotra, prakriti garha〉、如來智、衆生藏、法性、眞如性、自性清淨心、など漢譯の異譯語を挙げれば實に夥たしい。しかもそれらは殆んど〈dhātu〉と〈gotra〉に基づく派生的修飾語である。〈dhātu〉を漢譯するのに「界」「性」のほかに「眞如性・如來性・法身・法性・法界・法體・衆生・衆生界・衆生性・如來藏・佛性・因」と意譯し、〈gotra〉「性」「佛性(種性)」のほかに「如來性・涅槃性・清淨(性)・(佛性清淨)正因」などと譯しているのは、漢譯者が本論書の如來藏説において〈dhātu〉〈gotra〉の語義の持つ役割を強く意識し、如何に苦慮して譯出したかの跡とよく留めている。

註① 實性論については拙稿「如來藏と佛性」(佛敎大學學報、第三十一號 p. 55 及び註⑩の論文) 及び高田仁覺「究竟一乘實性論の序品について」(密敎文化第三一號) 參照、なお、その構造と原型についての推定論考としては、高崎直道「究竟一乘實性論の構造と原型」(宗教研究第一五五號) がある。

② 中村瑞隆「三寶と如來藏に關する一考察」(大崎學報第九七號) 參照。

③ 漢本では頌釋合わせて全四卷中、第三卷全部を「性」義の釋である「一切有如來藏品第五」に充てており、梵藏本の論釋〈vyākhyā〉では、漢本の三寶品と如來藏品とを合わせて「如來藏品」と名づけ全體の三分の二を占めている。

Dhātu ~ Gotra

④ 梵本=ジョンストン本 p. 21. 6~8°。

藏本=デリゲ版・83・a°。

漢本=大正・三一・813・c°。

⑤ 梵本=Ibid. p. 25・4~5°。

藏本=Ibid. 86・a°。

漢本=Ibid. 827・c°。

⑥ 梵本=Ibid. p. 26・1~4°。

藏本=Ibid. 87・a°。

漢本=Ibid. 813・c°。

⑦ 梵本=Ibid. p. 26・5~9°。

藏本=Ibid. 87・a°。

漢本=Ibid. 828・a°。

⑧ 前註の續々°。

⑨ 前掲拙稿「如來藏と佛性」三、如來藏義について(b)、参照。

⑩ 梵本=Ibid. p. 21。

藏本=Ibid. 88・d°。

漢本=Ibid. 827・a°。

⑪ 梵本=Ibid. p. 72・12~13°。

藏本=Ibid. 111・b°。

漢本=Ibid. 839・a°。

⑫ 前掲服部氏論文「gotra について」参照。

⑬ 轉依の轉が五五頁で示めたように、 \vee paravriti \vee と \vee parivriti \vee と二種の用語があるところに、如來藏說と唯識說における使用例の相違において問題があるが(このことは大乘莊嚴經論において指摘し得る)それらを含めての轉依の問題について

は別致を期したい。

⑭ 同論文、及び中村瑞隆「究竟一乘實性論に表われた佛身論」(印度學佛教學研究一ノ二・p. 112) 参照。

⑮ この十義については前掲山口益「般若思想史」参照。

⑯ 前掲拙稿「如來藏と佛性」参照。

五

實性論における如來藏説については、なお述べるべき多くの問題があるが、われわれはとりあえず所期のことに關する考究を通じて、主として內在的傾向を持つ〈gotra〉の佛性と、普遍的傾向を持つ〈dhātu〉の佛性とを内包し消化することによつて、如來藏説が展開していることを知つた。すなわち、如來の〈gotra〉は清淨性とも用いられているように、本來清淨な自性清淨心であるから、法身と不二である衆生の清淨な自性を意味する。それは衆生界に遍在する如來の〈dhātu〉である佛性にはかならない。この點が〈bija〉を〈gotra〉とする唯識説と根本的に異なるところである。如來たるべき性、如來の種姓としての〈gotra〉と、法の本質、法そのもののあらわれ(眞如)である〈dhātu〉とは全一同性でなければならぬ。かくしてはじめて、本論致の冒頭において擧げた實性論の引用文の意味するところを、十二分に肯定し得るであらう。インド佛教思想においては如來藏・佛性が〈gotra〉、〈dhātu〉によつて跡づけられていたということは、まことにうべなるかなである。

——以上——

(昭和三四・二・七)